慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「考訂やまと詞」
Sub Title	"Yamato Kotoba" bibliographic study of the vocabulary of old poetic Japanese words
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.25- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

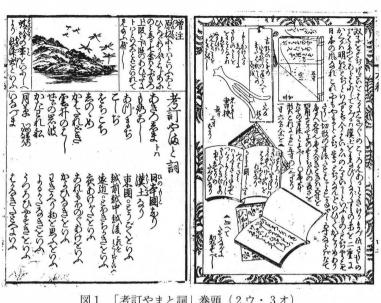
「考訂やまと詞_

関 場 武

生の還曆記念論文集・近世篇(昭63・12)に提出申し上げた「意見早引大善節用」に次ぐものである。諸般の た。そして何より有難いことに、勉強することに対し弾みをつけて下さったのである。今回のレポートは、先 で国文学専攻の授業を持たれた時で、小生も先生もずっと若かった。毎週毎週、近松の作品に関するレポートの 今を去ること三十年前、檜谷先生には国文学演習で近松の「曽根崎心中」をお習いした。たしか初めて三田 毎時間、 何回か繰り返される質問の絨緞爆撃は辛かったが、調べることの大切さと面白さを教えて頂い

事情からまた手近の資料を使ってのものとなってしまったが、何卒御寛恕の程を。

近世初頭から後期に至るまで版を重ねて行った小冊子に「大和言葉」、「大和詞大成」等と題するものがある。 つけとりとハ あきつしまとハーにつほんの名なり、日のもととは あかぬわかれかなしき事、しかふすのべとは「きみとねハやとの事也、たまくしけとハ「あかつき 同わかてうの事也、もろこしとは からこくをいふ……ゆふ 同書は



3オ) 「考訂やまと詞」 図 1 巻頭 2

等と、あるものは任意に、

あるものはイロハ分けに、

また

くせかいを云

(延宝九年八月松會版

とハこがる、をいふ

一、すゝしき道とハ こくら

すりはり山とハーかなわぬ心をいふ也 一、すみかま

うふをいふ

一、いななきとハ

いなかをいふ……一、

、いまち月とハ

十八夜をいふ

一、いもせとハ

部類別に

「和哥誹諧の便となる艷詞」を集め解説したもの

学の一助と成し、源氏・伊勢、名にしあふ物語の哥書を見がく こもじょ な いんじ いせ な ものがたり かしょ 四八字)を付して刊行されたり、往来物の頭書・付録に収 連俳用語辞典、 七、八のものも通行する。ともあれ、本書は、 るが、少ないもので一二七語、 して賣られたものであった。 んに甚さとし安」(同・明治十七年求板本見返し)きものと (享保十一 「恋の詞付合」 一年菱屋版後印本・巻末広告)で、「和歌連誹の初 雅語辞典として使われたもののようで、 (五二項)や「世話字尽 見出し語数は本によって異な 多いもので八一二語。二七 (世話字撰集)」 簡便な歌語 $\widehat{\Xi}$ 末

0

められることも多く、 47 残存する伝本は少なくない。諸本については、 (橋本博士還曆記念「国語学論集」等所収)があるが、未だ整理しきれぬ点が多 既に加藤定彦氏の報告 (近世文学資料類従・古俳

諧 天保二辛卯(一八三一)年孟春に出版したものである。 今回ここに翻刻・紹介するのは、 〈昭51・9〉)や真下三郎氏の論 貞享元 (一六八四) 但し種彦の序は天保壬辰(三年) 年の原版に、 弄花翁が考訂を加え、 元旦となっており、 柳亭種彦が閲し序を与え、

刊行時期

については疑問も残る。まず底本にした丹澤文庫本の書型の概要を記す。

中本一 ₩, 鶯緑色無地表紙。 竪一八・二、横一二・四糎

題簽 表紙左肩。 下方に鶴喜の舞鶴の商標のある短冊形白紙、 飾り枠内に「大和詞重訂」と大字で記す。 竪一三・八

右上に飾り檜扇があり下っている房の間に「大和詞」と出し、

前見返し

重郭付白紙。

また、

左上に「辛卯孟春再板/柳亭閲並序/弄花翁考訂とあり、

言う「再板」とは、 刊記にあるように貞享元年の原板に対する天保二年辛卯孟春の再板という意味であろう。

序題 考訂大和詞序」。 末に「天保壬辰元旦柳亭種彦吉書」とアリ。天保壬辰は三年のことであり、 刊記や前見返しの年

刊記 終丁オ本文末左方に 「原板」貞享元年子三月吉日/再刻天保二年辛卯孟春/ 《 仙崔堂 鶴屋喜右衞門板書林並地本錦繪問丸東都通油町 内題

考訂やまと詞」。

尾題

大和詞 呈。

記より

年後のものである

版心 白口。 丁数 上方に界線を置きその下に「大和」と書名を記し、 一三丁半。 (前見返し)+ (序・前付) 二+ (本文) 一一丁半。 下部に丁付。 丁付 終丁は後見返しに貼付。 П ノー~二、 壱~十 終丁には

左下に島台の上に立つ鶴の姿を描く。 <u> — 27 — </u>

下方に「仙鶴堂梓」と右から記

いまち月とい いろのなりとい いろげとい いなるにとい 0 いいう いりせしい ・十八夜どり いかっていかからか oたのりてとくうとい 。本ておりするうとの いるのから 。十六日の月という 文版とり らてうるからるとろ

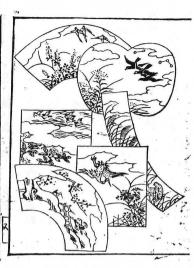


図 2 享保11年版巻頭

備考

原装なれど手ズレ等少しあり。

所、 そして「原板にかくあり」(一七九・つま木 のである。 刊記にあるように、本書は貞享元年版を基にし評注を加えたも 「元板に」と「前板に」が各二、「前板に」云々が一ヶ所ある。 集中、「原板に」とある所が一ヶ所、 頭書 「原板に」が七ヶ 〈数字は私に

付した項目番号。以下同〉)、「元板此哥を引り」 (二一〇・のきば

挿画 行数 に挿し絵あり。 本文一ウ・二オに見開き図がある他、 (本文) 振り仮名、 毎半葉一四行、 絵師は、 濁点あり。 (字) 九行で、 他は不等。

字数

不

本文一ウ見開き図右下方に「一勇 前付、 頭書一〇ヶ所

本文部分は四周単辺、竪一五・三五、 /國芳画」とある通り歌川國芳。 横一〇・五糎。 本文

匡郭

飾り枠付、 オ、二ウー一〇オには頭書欄アリ。 前付オは子持ち枠付。 また、 序、

前付ウは

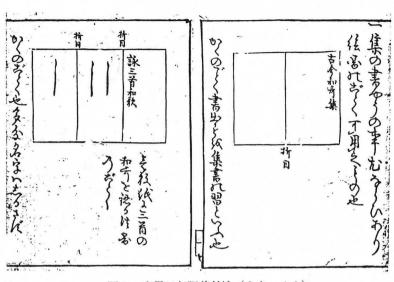


図 3

までの二一四項が前にあり、次いで 東國。とうごくをいふ」~「すりばり山)かなハぬ事をいふ、ふじ のけぶりたえぬおもひをいふ、まつふく風 六。それに対し約四分の一の五五項に注を付している。すなわち、 等と批判したり不審を投げかけている箇所がある。項目数は二二 「あきつしまト^^ 日本國なり、もろこし 漢土なり、あづまぢ かしましきをいふ

か」、「ますらを」、「おにのしこ草」の一二項分につき、各々批注 として、「うつ、こ、ろ」、「かげろふ」、「はまちどり」~「さをし

以下ハ前板に見えて、ことに不審の条→なり、○マルの目安をいかが記され

つけたるハ翁が増注と見給ふべし

の草 頭書)といった具合に、たゞ原版を引いている所と、

原板にすみよしの浦をいふとあるハこ、ろえがたきことなが

5 私にあらためず(一四五・わだつみ 頭書)

原板に此哥を引く、よそに見てすぐるをいふとハ、あまりな

同

るあやまりゆゑ、あらたむ(一五三・みねの白雲

前板にいな舟とハしげき思ひをいふとあり、 舟ののぼりくだ

まで何回か版刷を重ねて行くのであるが、その前付に、集の書やうの事、 補大和言葉」の前付に示唆を受けている可能性がある。 が、この「考訂やまと詞」のそれは、享保十一(一七二六)年八月に永原屋から刊行されたイロハ分けの大和言葉集「増 短冊の書き様は元禄以降の節用集の前付や往来物の付録等にもよく見られるところ。 ところで、本書の前付には、 冊子の綴じ方や書き出し様、栞や書挾について図入りで説明している個所がある。 同書は後に書型を示すように、 特筆するには値しないかもしれぬ 明治十七(一八八四)

た関係者の眼にとまった可能性は大きい。これ以上徒らに推論を積み重ねることは避け、 に関する記事は、 めているのが特色である。 て記され、末に「右哥道之式ハ、ある人の書をかれしを、今世にちりばむのみ欤/于時/享保十二丁未年正月吉日」と留 の専売特許ではない。しかし、 (図版1および3参照) 折本で部門分けという特異な形態を有つ宝暦二(一七五二)年版の「増補大和言葉」にもあり、 本書は或いはそれを享けているかもしれないのである。 因に、その享保十一年八月版系統の諸本をあげると、次の如くである。 流布した度合からして本書のそれがこの「考訂やまと詞」の、繪師一勇斎国芳をも含め 懐紙・短冊の書様の事が図入りで三丁に亙っ 大和言葉の集に於ける色紙短冊 これも後考を俟つこととした 年に至る 本書 计法

通柳馬場東入ル町永原屋孫兵衞板」とあり。 「恋の詞 【A】小本一冊。題簽 付合」、「世話字尽」と題す。 やまと詞大成」。序題 刊記 また、 終丁ウ「世話字尽」末左方に「享保十一丙午年八月吉日校正/京高辻 やまと詞之序 (久樂山人書)」。 内題 後見返し匡郭内に、 上に大きく「古筆類」と右横書きに出し、 増補大和言葉」。 付録 がは各 界

枠内、一~五。(本文)▲二~四十八、四十九五十、五十一~六十五終。丁数 線を置いて下に 有」と右から記す。版心 現録に 安賣/掛物類/色紙短冊、キャラケーかけものるい しきし たんさく 白口、下方に丁付のみ。丁付 一諸額類 /唐筆類/書本類」と記し、更に界線を置いて下に「品、ヒラムラ。 タッサルルル。 (序)序一~二、(前付)丁付は各丁裏ノド側匡郭左下小 全七〇丁。(序)二+(前付)

本文は一〇行。

備考 冒頭久樂山人の序は次の通り。(本文)六三丁。匡郭 三周単辺。版心側にはナシ。行数

る波の間に~~ひろい集めをきし玉を、かいやり捨んも此道の本意にあらざれバとて、 ながら編なして、やまとこと葉と名づく、このおもむきを、やつかれにいさゝか述よといふに、 するに、なをつくば山のしげきことの葉なれば、此面彼面にしりがたく、岩瀬の森のいはれぬたくひハ、もりするに、なをつくば山のしげきことの葉なれば、此のもなり おしむ谷の鮴もち、いづれか敷嶌の道しるべならざらん、千早振神代の俳優ハ、人の世にをよんで俳諧につらず。 ままままな まままま それ哥ハ天地いまだひらけざる時より出来しとかや、されば、青きをふみてよろこぶ野邊の鶯、黄ばみ落るを さかんにたのしみもてあそべり、是を好めるうなひ子のたよりともなりねかしと、 あづさにちりばめんと 中村氏冨丸が心をよす いなみがたく

31 —

丁ウを奥付(刊記)部分に仕立てたため、付録の「世話字尽」は半丁分少なく、世風俗、 保十一丙午年八月吉日元板/寛政四五年菊月吉日再刻/書林 より劣る。【Bロ】Bイ本の巻末に「飛板書略目録 【Bイ】刊記の書肆名部分が「寺町通松原上ル町 (末に「尾州賣所 名古屋本町九丁目ひしや久兵衛」とアリ)。【C】B本の再刻。 京寺町通松原上ル町北ヨリ/書林 菱屋治兵衛板」となっているもの。「校正」の二字ナシ。 京都寺町通松原上ル町西側北より菱屋治兵衛板]と記す。終 菱屋治兵衛」と題する広告が七丁分 満遍~強直、屑計の三一 刊記 終丁ウに「享 刷 り A

て、拙き硯をならしのをかの露ばかり筆をくハふるものならし

選發兌/大野木寶文堂 (印)/大阪書肆 四字目までで終っている。 【E】明治十七年求版本。題簽 燕脂色刷り白紙。「増補大和詞大成 順慶町心斎橋通り柏原屋清右衛門」となっているもの。Cの求版。【Dロ】Dイ本の後見返し匡郭内に「和漢書籍精 亀田文庫本は巻末に菱屋治兵衛の「飛板書略目録」を付す。【Dイ】C本の書肆の部分が「書 心齋橋南エ壹丁目秋田屋市兵衞」とあるもの。 上」、「増補やまと言葉 下」。上巻前見返し すなわち秋田屋発賣本である。

紅色地紙。 増補大和詞大成」と書名を出し、 子持ち枠付匡郭内を左右の欄が大きくなるようにして竪に三ツ割にし、 右に松・竹・ 梅の絵、 真中に

左の欄に

此書ハ新に増補し、 悉誤りを正し、 引哥を補て和歌連誹の初学の一助と成し、源氏・伊勢名にしあふ物語のいますと まきは口もかれんはこ しょぎく このじょ 々 りんじ こりせん

尾題 年五月十九日御届 増補大和詞卷之下序図」。これは享保版の前付け五丁目に在った絵図を此処に移動させ題を付け加えたものである。 の小型長方朱印を捺す。 と内容案内を記す。また上欄外に「明治十七年五月」と右横書きに年記を記す。 哥書を見んに甚さとし安く、 大和詞巻之上終」(下巻にはナシ))。刊記 /壱丁目十八番地 書肆東京京橋區南傳馬町/書肆 版心 序および前付けには何もナシ。丁付 猶恋の詞 付合并世話字盡を追加して、 松山堂 下巻終丁ウ匡郭内に「享保十一丙年年八月吉日元版/明治十七甲 藤井利八板 (陰刻印「枩山/堂」)。右下スミに「定價金三拾錢」 〈上〉(序)版心に在ったものを、前付けと同 世に弘る者ならん 内題 £ 増補大和言葉」、(下)

前に記した如く、 じ様に各丁裏ノド側左下スミ匡郭利用の小枠内に移し、ロノー、ロノ二とする。 (前付け)一~三。 (本文) ▲三十四~四十八、 前付けの五丁目を下巻巻頭に移し、 四十九五十、五十一~六十五終。丁数 丁付は削っている。(本文)▲二~三十三。〈下〉 (上) 三八丁 (下) 三二丁。 四は削る。 初丁にはナ

D本の求板。下巻D本の本文丁付三十三ウ最終行は○に「江ゑ」の陰刻のイロハ分け標目のみであるが、

本

書はそれを下巻本文冒頭に移している。そしてそれに伴い、三十四オ一行目の「一えにし」の四字を改刻してやゝ

下方にずらしてある。

翻刻

、底本に忠実ならんことを期したが、私に改行、句切りを施した。○点は原本のマヽである。

各丁表・裏の末にまとめて記した。頭書で言及している項目は、

付して他と区別した。 一、底本には丹澤文庫本を使用した。

頭書部分は二字下げとし、

考言大利詞序

漫に詞を添るときハ、新に書を作るに似たり、如何せんと嘆ず、予曰、原来童蒙の玩弄なり、然のいばます。 舊本大和詞ハ何人の作なる事を知らず、今是を考訂するハ友人弄花翁なり、翁子にいへらく、言言はやまとことば、なになし、まて とは、虫の部を正しかはびらこと記しなバ、なま長くして打聞わろし、蜻蛉ハ稲妻と對句のやうにて虫めかず、是が往古とは、虫の部を正しかはびらこと記しなバ、なま長くして打聞わろし、蜻蛉ハ稲妻と對句のやうにて虫めかず、是がほかし 此冊子の不審ことを削り 皇國学びの瘤を出し、た

を書れたれバ、 用ひ、不審ながらもおほよそに聞ゆる詞ハ、それなりけり、いよしく聞えぬ事のみ抄出、巻尾に連てぽつしくと何か注釋。 ましん まちょくおん こんき 翁 惘れて座を退き、持てうまれた癇 積にて、えしれた歌の誤りハそこらこゝらをあらためしが、少しくおのれが意見もおきない。 *** りて百 有余年を過たれバ、俗につたへしえしれぬ歌も」(一オ)又考 証とするに足りと、いけざうさなく答へけれバ、からくう。 まん まん の機織なりと博識ぶりに綴らんより、てふちよ・とんぼやきりぐ~すと、只一口にいふこそよけれ、ことに此書、はます。 まん更捨べき書にもあらず、是を童子にあたへなバ、竹馬芥鶏輪廻し、めんてう打の戯れより、少しハぎぼすった。

日本武尊、日の高みの国より、キャルとだけのみことなったか 常陸をすぎ甲斐にいたり、酒折の宮にましましゝときった。

にひばりつくばをすぎていくよかねつる

とうたひて、さぶらふ人にとはせ給ひしに、おんこたへをせざりけれバ、火をともしてはんべる翁ぞそのすゑを申ける かゞなへてよにハこゝのよひにハとをかを

○此御哥、 古事記にハ。ばり。日本紀にハ。まり。 とあり、 ひたちのにひばりつくばといふ地の名を、手まりのこと

みれバ、夜ハ九夜日ハ十日なりといへるなり、手まりつくに、ひふみよといへるハ、ふるき世よりのことなるべしと、かららまり、おきなも、手まりつくかずの縁語をとりて御こたへまうしゝなり、かゞなへてハかぞへてなり、かぞへて給ひしなり、おきなも、手まりつくかずの縁語をとりて御こたへまうしゝなり、かゞなへてハかぞへてなり、かぞへて によそへ、にひまりをつくといひかけ、いくよかと、かずの字をしもにおきて、つくばをすぎていく夜か寐たるととひ

34

荷田のうしの説なり」(二オ)

さうし切形の寸法、たとはゞ、よこかねざし五寸ならバたて唐尺五寸也、唐尺なきときハ、五寸を四角にとりて、 ぢやうこそ日本の風なれ、これにもやまととぢ・鴬とぢなんどいひて、かはりめあり づるハ、漢土をまなびしなり、すみの糸を二重にかくるハ明朝とぢといふとぞ、今はいかいのくわいしといふもの、と 双子をとぢ、げだいをはるに、くさべ〜のこゝろえあることゝきけり、まづ此さうしのごとく、糸をあらはにしてと

すみちがひの長さをたての寸法とすべし、○唐本形ハこれによこ五寸の三ッわり一寸六分余を加へて、たてながに製す

(図)此ところよりかきいだしたるさうしハ、まん中へげだいをはるがふるきれいなり(二丁ウラ) 此ところよりかきい(一丁オモテ)

だしたるさうしハ、げだいをひだりへよせてはるべし

(図)みんてうとぢ 此はすの寸をたての寸法とすべし

図したるふんはさみハ、うすきかねにてつくり、よみかけしさうしへはさむものにて、しをりのたぐひなり」(ニウ) 吉野山こその柴折の道かへて よみかけたるしるしに、さうしのかみををることなかれ、しをりあるひハふんはさみをはさむべし (図・しをり) また見ぬかたの花をたづねん (図・ふんはさみ)書挟 長サ三寸ばかり、 かみに

考訂やまと詞

前・越中・越後 これをみこしぢといふ わきかへり物を思ふをいふ *あきつしまトハ かはたれどき これもほのべくあけをいふ 日本國なり もろこし かたわれ船 漢土なり よるかたなきをいふ をちこち 遠近○とほきちかきをいふ あづまぢ 東國〇とうごくをいふ 雲井のはし かよひなきをいふ 月草 つゆ草の事なり、うつろひやすき しの、め 夜あけがた こしぢ ぜゞの岩波 越

をいふ いなづま はかなきたとへにいふ

だにトハいふことばをいれて見給ふべし (頭書) 増注 蜻蛉の事を、いにしへより秋津虫といふ」(三オ) 原板にトハといふことひとつぐ〜あり、今はじめにのみしるして余ハはぶきつ、上段と下段のあひばだ

(図 三ウ・四オ)(一勇斎國芳画

- 35 **-**

日本の國の形、かの虫に似たるゆゑに、あきつ鳴といふとぞ

のを るおもひにたとへいふ かはたけトペうきふししげきをいふ。 筈。と書り* ながつみ まこもの事なり いのちをいふ なはしろ水 ひくかたおほきをいふ あしびき 山といふ枕 詞也こと、かしら書にあり あかねさす。日のいづるをいふれ詞なり、 はながたみ 花をつむ籠をいふ おほぬさ大麻 ひくてあまたの事をいふ 身をしる雨 なみだをいふ くずの風刃らずの 人のため 玉がしは うらみをいふ いつはりをいふ 木にあらず、石の事なり うづみ火 せな したにくゆ 男の事をい たま は

ふ」(四ウ) 又あにの事をも兄人などいふ

(頭書)○川竹ハ節のしげき竹なり、それに憂ふししげきをたとへていふ也

○ 偽といふ字をわくれバイの為なり

○葛の葉ハ風ふけバ裏を見するもの也、それを恨みにたとへていふなり

ずおほくあり、すゑ~~までそのこゝろにて見給ふべし

いる をいふ はる、をい あきの田 すがのね も、しき 内裡をいふ ほにいづる思ひをいふ ふゆの田 山菅の根なり、長きたとへにいふ たのみなきをいふ 一トむらず、き 是もほにいづる事なり 谷のこほり とけやらぬ事をいふ れんりのえだ よこぐも 日の出んとするときたなびく雲をいふ ふかきちぎりをいふ はなたちばな ほにいづる 思ひの色のあら むかしをしのぶ事を ゆく水 かへらぬ事

をみなへし 人のくねるにたとへいふ あすか川 かはりやすき事にたとふ

いふハ兄弟の良なり、音にて連枝とも〈図〉 (頭書)○天にあらバ比翼の鳥地にあらば連理の枝と長 恨哥に見えたるより、ふかきちぎりの事とす、又 連る枝と(頭書)○天にあらべ比翼の鳥地にあらば連理の枝と長 恨哥に見えたるより、ふかきちぎりの事とす、又 連る枝と

○よの中を何にたとへんあすか川 きのふのふちハけふのせとなる」(五オ)

いる いぎたなしトベー俗にねぼうといふほどの事なり いざよひ 十六日の月 たちまち月 十七日の月 ぬれぎぬ なき名のたつをいふ るまち月

十八日の月 もち月 十五日の月を ふしまち月 十九

の叓をいふがきにあり 日の月八雲にハふし待も をぐるま小車也 めぐりあはんといふたとへにいふ ねまち月 しづ心なき しづかなる心なきをいふ 廿日の月 しきたへ 枕といふべきまくらことばなり いもがりゆく 女のもとへかよふをいふ おきこぐふね とまりさだめぬをいふ わがせこ わが夫*

りもいへり、ゆゑにふうふのことをいもせといへり (頭書)○いもとハ女の事をいふ、許とハもとといふ叓なり ○わがせこ、わがをつとといふ事なり。せ。とばか 衣通姫〉○わがせこがくべきよひなりさ、がにのできます。 くものふるまひかねてしるしも こゝにハさゝがにのく

もとかさねていへども、たゞさゝがにとばかりいひてもくもの事也」(五ウ)

みやびたる* みやこめきてうるはしき事 ひなびたる ゐなかめきてつたなき事* みとのまくばひ 女男まじ

はるをいふ 工合のよきといふ詞も是より出たりとぞ みつわぐむ 年おいてこしかゞみたるをいふ

37 —



「考訂やまと詞」前見返し 図 4

字なりともいふ

図

あまのたくものならねどもけふり草

人のたち

てふトハ しぼるものなり」(六オ) といふ。 といふ事なり、 恋すてふハ。恋するとい

○紅花ハさきいづると、その花のすゑをつみてべにを

るのしほとこそなれ

をいふ あと。 り草 めもす すゞしき道 手跡也 たばこの事なり 終日の事なり ごくらくの事なり 日ぐらし ひぢがきあめ 朝より夕ぐれまでをいふ すゑつむ花 べにの花をいふ みづぐき にはかにふりくる小雨 筆の事。 水ぐきの

U

鳥

鵜の夏なり

ひもかゞみ

氷の事なり

け*

(頭書) ○鄙とハゐなかの事なり、 ひなことばとい

俗といふ事なり、 りなり、うつくしきことをみやびやかなどいふ、 ひなびハゐなかぶり、

ハゐなか詞なり、さて、ひなび・みやびのひの字ハ風 みやびハ都ぶ

宮^みゃ

ŋ いさ、めかりそめの事、卒爾の意也 どのうごきゆるぐ事也 などいふハ、こひしく思ふ事也 ふ。干てふハ。ほすといふ。といふ事也 (頭書)○こひすてふわが名ハまだきたちにけり(人しれずこそおもひそめしか)○春すきて夏きにけらし白たへ とはに 常にといふ事 たつき 便なり さかゆく 栄るなり こゝろなぐさ 心なぐさめなり しばなく 鳥などのしばく〜鳴をいふ しのぶ 人目をしのぶハ人にかくるゝ也、人をしのぶ。むかしをしのぶ。 すだく 多く集る事をいふ わくらは一希。たまさか。をいふ ことにいで、 詞にいで、な たゆたふ

衣ほすてふあまのかく山 ○てふといふ詞、ふるくハちふともいへり、今ゐなか詞に、なんだちふといふハ、

とことはこれも常の事、万葉に常不止と書り ゆゑに、人のそのところへゆかんとして、ゆきやらず、ためらひをるをも、たゆたふといへり」(六ウ) なにといふこと、とふことにて、ふるき詞なり、笑ふべからず ○たゆたふハ、ふねなどのゆるぎうごくことなれど、はしるにハあらず、たゞおなじところにありてゆるぐをいふ。 みどりのはやし 盗人の事をいふ しらなみ かみにおなじ、*

--- 39 ---

こしの間をいふ、今。時の間といふにおなじ、草をかりてつかぬるほどの間也 盗人の事也 なげ なほざりなり、なげのなさけトハ、なほざりにてしんじつならざるなさけ也 檜。ひの木の叓なり うつろふ(移る事なり、花のうつろふハさかりのすぐる事なり つかぬる又たがねる たばねるとい つかのま

ひさに 久しきをいふ。すゑひさに。ハ。すゑひさしく。いくひさにハ。いく久しく。也。 はらから 兄弟の

へるなり、風ふかばおきつしらなみたつた山 夜はにや君がひとりこゆらん〈図〉」(七オ)

たゞちトハ くするも。といふ事也 あやなし 無益といふ事なり 直に。といふ事 心あて「おしはかる。すゐりやう。の叓なり そとも 家の外をいふ つて 傳るなり いやまし いよくへまさるをいふ よすが たよりなり あさはか 淺きをいふあさくはかなきと あふさきるさ とするもか いまし 今とい

ふ事也 せみのはごろも 夏きるきぬのうすきをいふ てもたゆく 手のだるきをいふ 琴ひき草 松の

こと也ともいふ 風見草 柳のことなり

(頭書)○たゞちにゆくハすぐにゆくなり。 たゞちにきたるハすぐにくるなり

○これをよすがに。ハ。これをたよりになり、よすがとして。ハ。たよりとしてなり

○人をあさはかといふは、ちゑのあさきなり、あさはかなるすまひなどいふハ、おくふかからぬ家なり

〇人にいひやりてつたふることばを言傳といふにて知るべし

〇今をいましといふ。し。ハ、助字とて、そへたるのみにて意ハなし、「あふことのたえてしなくバ」、あふことの たえてなくバなり、「たびをしぞおもふ、「ふねをしぞおもふ」、たびをおもふ。ふねをおもふといふことにて。し。

の字にハこ、ろなし」(七ウ)

ゆめ見草

さくらのことなり

ふかみ草又廿日草 牡丹のことなり もゝちどり 鴬又春いろ (\ の鳥の鳴を

いふとぞりふく いふ 紙とかく、はながみをいふ しハ、我といふ字をへだてゝ黒かみとうけたる也、「ぬば玉のゆめ」といふハ、夜のゆめといふべき夜の字をはぶき (頭書)〈図〉鳥羽玉、又ぬば玉といふもおなじ。黒き。やみ。夜。などいふ枕詞なり、「うば玉のわが黒かみ」と詠 あさがほ 日かげをまたぬなど、はなかきことにいふ くだかけ 鶏をいふ かはびらこ そほづ 田にある鳥おどしをいふ 蝶てふをいふ ましら 猿なり、又ましこトモましらばかり かはらよもぎ 菊をいふ あはび かたおもひをいふ すべなき、詮方なき也、俗にいふがなき うばたま くらきなどいふ枕詞、* なよし 鰡ぼらといふ魚也、 たたう紙

たる也」(八オ)

すべらきトハー皇王みかどの御事をまうす らむるをいふ、はぢらふさまなり、「面をあかうすれバ鼻の白く見ゆるものゆゑにかくいふ うはを 後の夫をいふ (頭書)○みかまぎハ御釜木とかけり、大内の詞のよし也、今俗に、たき木の事をまきといふも、釜木のか文字を さ、らえをとこ 月をいふ みかまぎ たき木をいふ うはなり 後妻をいふ さえだ。木にもあれ草にもあれ、小き枝をいふ みとしろをだ 神の田をいふ ひつきのみこ 立太子をまうす 目しひ めの見えざるをいふ めづる 愛する事、又感ずるをもい* ひぢりこ 耳しひ みゝのきこえざ はなしろむ 泥の事をいふ 顔をあか

○月をめづる、花をめづるハ、愛する也。その詞にめづるなどいふハ、感ずるなり、よく〳〵わかつべし」

○御戸代小田なるべし みとしるをだ

略たるなるべしばき

— 41 —

みわの山 たづねてとへといふ意なり* 憩ノ字又休ノ字 つき わづらひをいふ、勞の字なり いをやすく 寐やすきをいふ ゆくりなく「不意也、おもひがけなきをいふ 面ぎらひ 子どもの人見しりをいふ きよみがせき なみだのか、るそでをいふ いこふ やすらふをいふ しかな草(萩をいふ、鹿鳴草也) ちおも 乳母をいふ をんなめ 妾をいふ 日ぐろむ 日にやけて色の黒くな 紅葉鳥 鹿のことをいふ

(頭書)○わがいほハ三輪の山もとこひしくバーとふらひきませ杉たてるかど「此古哥より、たづねとへといふこゝ なめげ 無礼の事、又むらいともいふ かはほり、蝙蝠なり、又あふぎの事をいふ

ろになれるなるべし、原板に見えたり

○むねハ富士袖ハ清見が関なれや「けふりも波もた、ぬ日ハなし」原板に此古哥を引たり

かはほりの羽にて蚊をうちはらふさまを見て、扇をはじめてつくりいだしたり、ゆゑに扇の異名をかはほりといふ

〈図〉」(九オ)

艶書也 はしたかトハ こひする人をいふ也* ちひろのそこ ふかき海也、恋にしづむたとへにいふ さうじ 精進の事 かいま見り物のすきよりのぞき見るをいふ けそう 懸想の字、人に思ひをかくる也、けそうびと、恋人といふにおなじ、けそう文、 わだつみ すみよしの浦をいふ* をみな 女なり みねの白雲 よそに見てすぎがたきをいふ たなばた まれにあふことをいふ おうな 老女なり、又うばともいふ

せきも

かいるくいるというともけんどまろうまとうかいませいうとつまであるとうない とはちゃういれないというかとととろうとうか かられるーとれていけのねらっせんけつれてはもるのくとできて ○いれるから古今のなの何やちゃもれるかもれれるのかからむ 一時中で、被なと書うおうまからそうわとりからしばかれ ○はないは他がほうるうか阿里がならのがからく大衆後とくまりでうかしているのからないのではらいないという いとつるしからからなるとうあるののおれんとりで といるよとろれいあるむ人のうとでろうろわー ときちゃうといめてのとととっことくまろかかもうろうべー 歌とりではらどうゆととつけからかきしますのかるとてあけらる そのないねかよるきつからしませらりのかっちょうされる うろしてれどがにのかせのできるの所制をあり文字のまとちの おくまなくそろ物という

ŋ

関

所

0)

番人也

たとへにいへり恋にハ人目の関など

のだ

0)

₺

ŋ

うらむる事をいふくずの葉のうら見ること、まへにくはしく見えたり

頭書)○七月、たままつりに用ひし麻がらの箸を火

「考訂やまと詞」本文12ウ・13オ

みとよみ、

○わだつみハたゞ大海の事也、

又海若とかきてわだつ

とあるハ、こゝろえがたきことながら、私にあらため

知らず

板に、此ごとく恋する人をいふとあり、

何のゆゑかハ

火にあつる、これを箸鷹といふと古書に見えたり、 にたきて、この日はじめて鷹をとやよりいだし、その

原

図 5

ひまをなみ ぐるをいふとハ、あまりなるあやまりゆゑ、あらたむ_ のみねのしらくも (九ウ) 暇なきをいふ。なみハ無いとま 原板に此哥を引て、よそに見てす

○田舎のまで備者とのうとの場が次天をおらのうきているるったからっところ

かっのとけかいたなりかわからもちとかるとっていていろうるとうのかつろと あて作るのというけるるくろうきとうてるできじましてあいといかのかっても

思えるいるとうわかのるかられてきたろどの大関やし るそうのをけらなりか

られとわりませられるをわなまってくるっていずしろうべし

よべてるトハ

ならこちのたつきするちのよけるもかつらろくもうだとろうる

いらざるの被抗されぐわりないるともさざめでラー

そのるかからせやよわかるかよのわりとれてえてあるあるる ○わりととまてるまてのをりかとらろうべーそれようれるくめてなくを

めりどんとえてめてぬるり

たされ一派氏できの巻のもろうこれもちろのるれだとてくれませ

ず

○よそにのみ見てややみなんかつらきの

たかまの山

さいのうろう

龍神の事とす、原板にすみよしの浦をいふ 43 -

ぬか 0

なり

゚ひたひをしたにつくるをいふ、ピタをする事、額突と書り、神にぬかつぐ、仏にぬかづく、拝する事也。 辛苦してといふ事 石などり 子供の手だま也ななげどりのけを ねぢけ人 あしき人也、侫人をいふ からうじ

て

字 うまびと よき人也、君子をいふ うはがひ きもの、うハまへをいふ ねぎらふ一労を慰むることば俗にたいきに同じ しづえ 木のしたえだをいふ いろはトイン母。いろせトイン兄。い ねもごろ ねんごろ也、 懇の

ば百歳の老女 みそぢ三+オ。よそぢ四+。いそぢ五+。むそぢ六+ な、そぢ七+。やそのおきな八+翁。も、とせのう

(頭書)無をなみといふ事、画上にかきたる、たれ~~もしる人丸の哥に、かたをなみといふも、かたの無ぉといふ

ないてくると解すべし ことなり 「わかのうらにしほがみちてくれバ、干瀉が無いから、芦の生てある辺ハ汐がこぬによつて、そこをさしてつるが、おります。」 芦辺をさして田鶴なきわたる。

44

瀉の無を片男波とな思ひあやまりそと貞徳の説也」(一〇才)だ。 タギ ゚ カピ タネ゚ わかの浦に汐みちくれバかたをなみ

いはとがしはトハ木にあらず、石のかどなり

まろ木ばし

ふみかへすをいふ

まがきの石

ふみへだつるをいふ

つま木 ものにこりたるをい*

たいと あはぬ事をいふ とまり舟 つながれたる亨をいふ ほとく ほとんど也。 殆の字

海 生死の事 まにく 随意の字。こゝろまかせ也 かけひの水 たえぐ〜なる事にたとへていふ

ふたつの か*

あ

けぐれ ふばかりもいふあやめとハ虵の異名なり、ふびあやめと、いるやり 夜あけんとして又一トたびくらくなるをいふ かの草の根・地のかたちに似たり、 あけくれ 朝暮なりにてわかつべしてうぼ ゆゑにあやめ草といふとぞ あやめ草

(頭書)○まろ木ばし。まがきの石、原板にならべ出せり

かよはせてしるし、なるべし

〇盛衰記に、わが恋ハ細谷川のまろ木ばし、ふみかへされてぬるゝ袖かな、これによりて、文かへすに踏かへすをずる。

籬の石も此たぐひにて、踏へだつるに文へだつるのかよひなるべし、これにも俗につたふる哥のありしにやあらん*** ○つま木。原板にかくあり、つま木ハたきゞなり、それをとるを、こるといふ、恋などに深く思ひこりたるを、つ

○かた糸をこなたかなたによりかけて あはずハなにをたまのをにせん」(一○ウ)

ま木こるによそへていふといふことなるべし

同じ が宿をしられじといふにたたふ ひおもはずとひがたみ る、たとへにいふ きりたち人 遠くへだ、りし人をいふ 青柳のいと みだれやすきをいふ 身をしるあめハふりぞまされる つらぬく玉 かずしらぬをいふ さくら花 はなだのおび* あだなることにいふ 宇治の橋姫 まつにむなしきたとへにいふ 中たゆる事のたとへにいふ しらぎく うつろひやすきをいふ とひがたみ、とひがたしといふ事なり、 ねやのあふぎ かたみをいふ しのぶずり もずの草ぐさ かずべくにおも 花の色衣 おもひみだ

はなだ色ハ今の花色也、今あさぎといふ色ハうすはなだなり

(頭書)

○はなだの帯、

元板にハうつろひやすきをいふとあり、

今八雲御抄の説にしたがふ

— 45 **–**

あやまりなり、黄をおびてさく花を、あさぎさくらといふにてしるべし むかしあさぎといひしハ、今うすがきといふ色のたぐひ也、黄のうすきもの也、あゐのうすきをあさぎといふハ、

花だのおびハ色いろの帯なり、花のばうしといふも、あるぞめのばうしをいふ、

るべし」(一一オ) ○みちのくのしのぶもじずりたれゆゑに みだれそめにしわれならなくに 此哥よりおもひみだる、ことにいふな

しかまの市ハ播磨なり、あやまり欤 にハあらぬをいふ俗にいふ否でハなき すゑの松山波こすトペ ちぎりのかはる事をいふ* まへたる。をしあゆかすな鼡とるべく かゞみ山 ふ、しかまとハみちのくの市をまうすなり、うつくしきかちんをそめてうるによつて、まうすなり、○前板にかくあり、 おもかげを見んといふ事 こしばがき あだちがはら おそろしき事をいふ あゆかすな。はたらかすなといふこゝろなり、はしたかのおき餌にせんとか たちがくれたるをいふ ふなばし いもせのなかたえたるをいふ しかまのかちん ひときの松 たよりなき身をいふ あひそめたるをい いなぶね いな

〔頭書)○君おきてあだし心をわがもたば すゑの松山なみハこえなん

最上川のぼれバくだる稲舟の いなにハあらずこのつきばかり

たとへか、不審」(一一ウ) 此哥より、いなにハあらぬことにいへり、前板に、いな舟とハしげき思ひをいふとあり、舟ののぼりくだりしげき

46 —

のきばの草 人をわする、をまうす也 三日月 よひにあはんとの事 すりばり山 かなハぬ事をいふ

ふじのけぶり たえぬおもひをいふ まつふく風 かしましきをいふ

(頭書)○なにぞこのしのぶにあらでふるさとの のきばにおふる草の名ぞうき

○なにぞこのしのぶにあらぬ草の名の 人の心やのきばなるらん 元板に此哥を引り

○三日月 ことハきこえつれど、いづれの哥よりいでし詞か知らず

磨針山の古事なるべし、意ハすこしたがひたれど、おほよそハきこゆべし、

以下ハ、前板に見えて、ことに不審の条~なり。。

○すりばり山

○マルの目安をつけたるハ、翁が増注と見給ふべし

うつ、こ、ろトパ すそはつれたるをいふ

○書あやまり欤、他本に狂 乱をいふとあり

かげろふトハ ゆふぐれに蚊のごとくなく虫なり かげろふに見しばかりにやはまち鳥 ゆくへもしらぬ恋ハまどはん

となり。蜉蝣と書るハぶゆのことなり、又くろきとんばうをも、かげろふといへり、よしやあしやハしらず、ふる。 ○かげろふにくさぐへの説あり。野馬。陽岑。とかけるハ、地上よりちらくへとたつ氣のことにて、いとゆふのこ

き説なり、蚊のごとくなく虫といふへいぶかし」(一二オ)

はまちどり-^^ あとを見る事をいふ はまちどりあとハみやこにかよへども 身ハ松山にねをのみぞなく ○此哥ハ、崇徳新院、さぬきの国阿野郡 松山の配所において大 乗 經をうつし、それを都にのぼせ給ふときの御製で出事の言語である。これではいまでは、これではいます。

--- 47 ---

なり、文字の事を鳥の跡といへバ、濱ちどりあととつゞけ、わがかきし文字ハみやこにゆけども、その身ハ松山には

花になく鴬-^ 哥よむ人をまうす也、水にすむかはづまでおなじ意也 なきつ、おはしますよしの御哥なり、さればはまちどりといひてあとを見ること、するハ、あやまりなるべし

〇たれも~~も知る古今の序の詞にて、鳥にもあれ虫にもあれ、生るものハ哥よむといへることなれバ、哥よむ人

の事とこ、ろうるハあ

ぬさトハー神へまゐらする物をいふ、ぬさハなしこれをたむけのぬさにせん「けづれバ神もなびくとぞきく ○幣帛。又祓麻と書り、神にまゐらする物といふハよし、此哥ハいとつたなし、たれも〳〵知るぬさもとりあへずぬき。 ぬき ぎ

は、きゞトハ ありとハ見えてあはぬ事 その原やふせやにおふる帚木の ありとハ見えてあはぬ君かな 手向山の神詠を引べし」(一二ウ)

○ありと見えてなき事をいふとこゝろうべし、それにつれなくあはぬ人をたとへし、源氏はゝきゞの巻の哥なり、

たれ~~もしる事なれバ、くはしく記さず

よぶこ鳥トハ さるの事なり をちこちのたつきもしらぬ山中に おぼつかなくもよぶこ鳥かな

○よぶこ鳥の秘説さまぐ〜あり、猿の事ともさだめがたし

あやめもしらぬトペ なみだのしげきをいふ

みだとハ、そゞろになみだのおつることにて、俗にいはゞ、わけもなくかなしきをいへり、なみだしげきことにの ○善惡又黒白など書り、あやめも知らぬくらき夜などいふハ、闇によしあしのわけがたきをいふ、あやめもしらぬな*****

みいふにハあらず

うちしきトハ ゐなかの事

てかさねていだし、なるべし」(一三オ)

さをしかトハ た、ずむ事をいふ

早き事にハあらず。さ。ハ、かの發語にて、たゞ。なへ。わらび。といふことなり、湯のことをさ湯といふにて知味。 ○さを鹿のさ文字ハ、發語とて、たゞ何の意もなく冠らせていふなり、早苗、早蕨、『幸を』 またま またま かきょ 早百合の類も、早ハ假字にて、

ますらをトベ かりする人をいふ ますらをが高まど山にせめくれバ さとにおちくるむさ、びぞこれ

るべし、さをしかハ牡鹿なり、たゝずむ事にハあらず源氏にさを廃らたゝずみぬべきと

○ますらをハ。健男。速男の字を当しもたま~~見ゆれど、おほくハ丈夫と書て、すぐよかにたけきをのこをいふ、

かりする人にかぎるべからず、こゝに引たる哥ハ、その丈夫がかりすることをよみたるなり

おにのしこ草トペものわすれぬ事をいふ、此草をうゑて見れバ、人をわすれぬとまうす事なり

り、それを誤りて、物わすれぬと」(一三ウ)こゝに記しゝ欤、一説ハ紫苑なりといふ、此草につきてくさぐ\の物。*** ○おにのしこ草に兩説あり、一説ハ萱 草といふ、此草の異名を忘憂草といひて、此草を見れバ憂ひを忘るゝといへいない。 はまき ばうごうき

がたりあれバ、もしそのうちに、人をわすれぬといふ古事もある欤、 詳 ならず

[原板] 貞享元年子三月吉日/再刻天保二年辛卯孟春/大和詞 异

仙寉堂 鶴屋喜右衞門板」(一四オ)書林並地本錦繪問丸東都通油町

49